

07-42

出血性胆嚢炎の一例

熊本赤十字病院 外科

○藤木 義敬、山永 成美、木村 有

胆嚢出血は上部消化管出血の1%弱に認められる比較的稀な疾患である。その為、腹痛伴い吐下血を起こした場合、消化管出血と判断されることが少なくない。今回我々は、黒色便を認め心窩部痛で来院し、画像上胆嚢出血を疑い出血性胆嚢炎と診断し手術した1例を経験したので、本院での同一疾患を含め、文献的考察を加え報告する。症例は42歳男性。平成22年2月頃より黒色便を認め、2日後8時より間歇的な心窩部痛を自覚し本院救急外来受診された。理学所見では、黒色便の既往から十二指腸潰瘍による痛みと考えられた。右季肋部に無痛性の腫大した胆嚢が触知できた。腹部超音波検査では胆嚢の緊満と内部エコーのある液体貯留を認め、胆嚢内に結石を認めた。腹部CTで胆嚢の著名な拡張と内部に低吸収域を呈す均一な液体貯留を認めた。胆砂、胆泥というよりは胆嚢出血による急性の出血性胆嚢炎と診断した。手術を念頭に置き入院精査を行った。合流異常や総胆管結石症、悪性腫瘍否定の為にMRIを撮影した。内部に出血を伴う高信号を示しており、胆嚢周囲や肝表に液体貯留を認めた。胆嚢壁には悪性を示唆する病変を認めなかった。合流異常は認めなかった。以上より胆嚢出血による出血性胆嚢炎と判断し入院1日目に開腹胆嚢摘出術を行った。内部には胆泥・大量の血腫を認めたが明らかな腫瘍はなく、粘膜面にも明らかな異常所見は認めなかった。病理所見では全層性に充出血、浮腫、好中球・好酸球浸潤がみられたが、内腔への出血の原因は不明で、悪性所見は認められなかった。本症例の発生機序は不明であったが、基礎疾患に伴う出血傾向、抗凝固剤の使用が増加しており、出血性胆嚢炎が増加することが予想される。消化管出血を主訴とする急性腹症の診察には、出血性胆嚢炎も考慮する必要があると考えられた。

07-44

ヘモクロマトーシスに合併した肝細胞癌の1切除症例

大津赤十字病院 外科

○花本 浩一、余語 寛匡、松林 潤、鬼頭 祥悟、
中山 雄介、北口 和彦、浦 克明、平良 薫、
大江 秀明、吉川 明、石上 俊一、田村 淳、
土井 隆一郎

ヘモクロマトーシスは肝臓に鉄沈着がおこる代謝性疾患であり、原発性と続発性がある。鉄代謝異常をきたし鉄吸収過剰および高度な鉄沈着の結果、肝硬変、糖尿病、心疾患等を発症するといわれており、さらに肝癌のハイリスク群とされている。今回、われわれは70歳と比較的高齢女性のヘモクロマトーシスに合併した肝細胞癌を経験したので報告する。

【症例】70歳、女性。慢性肝障害で経過観察中に肝細胞癌を指摘され当院に紹介された。CT検査の結果、肝内非腫瘍部のCT値の明らかな上昇を認め、右葉に約7センチの腫瘍が存在した。腫瘍を含む亜区域切除ならびに娘腫瘍の部分切除を施行した。病理検査の結果は非腫瘍はヘモクロマトーシスであり、腫瘍部は肝癌であった。術後経過は良好で、鉄代謝マーカー、画像検査によって経過をみている。

【結語】ヘモクロマトーシスにおける肝癌の発生率は正常肝の約200倍と報告されている。実際にヘモクロマトーシスに肝細胞癌を合併した報告は極めて少ないが、ヘモクロマトーシス患者の経過中には肝癌の発生に注意を払う必要がある。

07-43

膵MCN (mucinous cystic neoplasm) が疑われた左副腎嚢胞の1例

京都第二赤十字病院 外科

○原田 恭一、藤 信明、岡島 航、鎌田 陽介、
廣 賢、坂木 桃子、石井 亘、山田 圭吾、
松村 博臣、柿原 直樹、大垣 雅晴、飯塚 亮二、
井川 理、藤井 宏二、泉 浩、谷口 弘毅、竹中 温

【はじめに】近年IPMNやMCNの診断方法や手術適応が確立しつつあるが、ときに診断に苦慮することがある。今回、膵MCNが疑われ手術を施行した後腹膜嚢胞の1例を経験したので、文献的考察とともに報告する。

【症例】47歳女性。2年前の人間ドックのUSで膵嚢胞を指摘されていたが、今回の造影CTで膵嚢胞性腫瘍が疑われ、当院に紹介。EUSで多房性、MRIで隔壁を有する膵嚢胞を認め、膵体部のMCNと診断した。ただ、USの点状エコーや、CT・MRIでの肥厚した被膜やいわゆる夏みかん様の隔壁は有していなかった。最終的に、典型的なMCNではないものの、MCN疑いの術前診断により膵体尾部切除、脾摘を施行した。術中所見では嚢胞は膵よりはむしろ左副腎に固着しており同部からの嚢胞が疑われたため、左副腎を合併部分切除した。病理学的検査でAdrenal cyst (Endothelial cyst) との診断を得た。

【考察および結語】報告によると、中年女性の膵体尾部に生じた一定の大きさの嚢胞は悪性のpotentialがあり、手術適応とするものが多い。今回、MCNを除外しきれずに手術に踏み切り、副腎嚢胞であった1例を経験した。

07-45

肝細胞癌と類似した画像所見を呈した肝血管筋脂肪腫の一切除例

姫路赤十字病院 外科

○河合 毅、宮本 学、杉山 博信、納所 洋、
戸田 桂介、信久 徹治、遠藤 芳克、渡邊 貴紀、
甲斐 恭平、佐藤 四三

肝angiomyolipoma (血管筋脂肪腫) は比較的稀な良性腫瘍であるが、その構成成分の比率の違いにより多彩な画像所見を呈し、時に悪性腫瘍との鑑別に苦慮する症例に遭遇する。今回我々は術前検査にて脂肪成分を含む肝細胞癌との類似した画像所見を呈し、鑑別診断に苦慮した肝血管筋脂肪腫の一切除例を経験したので報告する。

【症例】60歳 女性。シェーグレン症候群・間質性肺炎にて前医通院中、肝腫瘍を指摘された。肝生検にて肝細胞癌を疑う所見であり、手術目的で当科紹介受診となった。

【血液生化学所見】Plt: 30,300/ μ l、PT: 152%、Alb: 3.9 g/dl、T.Bil: 0.6 IU/L、HBsAg (-)、HCV (-)、ICG-K: 0.220、ICG-R15: 3.7%と肝障害度A、Child-Pugh分類Aで、腫瘍マーカーはAFP: 4.8 ng/ml、PIVKA-II: 23 mAU/mlと正常値であった。

【画像所見】腹部エコーでは肝S4に辺縁低エコー域を伴う高エコーな腫瘍を認めた。ソナゾイド造影エコーでは同部位はvascular phaseで造影を認め、kuppfer phaseでは明らかなdefectを認めなかった。CTでは肝S4に造影早期相で濃染を認め、後期相でwash outを認める腫瘍を認めた。中肝静脈への浸潤も疑われた。SPIO-MRIでは肝S4にT1WIで軽度高信号、T2WIで高信号、DWIでも軽度高信号の腫瘍を認めた。

【治療経過】脂肪成分に富む高分化型肝細胞癌の診断にて中肝静脈を切除する拡大肝左葉切除術を施行した。術後経過良好にて術後21病日で退院となった。

【病理組織結果】脂肪細胞に富む腫瘍の辺縁に血管・平滑筋細胞を有する肝血管筋脂肪腫の所見であった。皮膜形成は認めず、血管内には髄外造血の所見も認めた。